



中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

平成25年3月12日発行 通算第66号

全国大会を終えて

全日音研長野大会実行委員長 長野県支部長 小林 雅彦 (須坂市立墨坂中学校長)



11月15日、晩秋の長野市で全日音研全国大会が、多くのご来賓をはじめ、全国各地から約1,100名の先生方に参加していただきながら開催され、盛会のうちに終了できましたことに対し、心より御礼申し上げます。

本年度は中学校の新学習指導要領完全実施の年です。長野では大会主題を「高めよう！音楽の確かな力 味わおう！音楽の美しさ 分かち合おう！音楽の喜び」、中学校の研究主題を「音楽の意味や価値を自ら見いだし 心が響き合う授業づくり」として研究をすすめてきました。当日は歌唱・創作・鑑賞の領域について、6中学校の授業を公開しましたが、多くの参会者から貴重なご意見をいただくことができました。うれしかったことは、どなたも単に「長野を見に来た」という意識でなく、「長野と一緒に考える」姿勢をもってご参加いただいたことです。このことは私たちにとって大きな励みになりました。

本大会を通して、どの子にも音楽の力を確実に身につける授業、その子なりの美しさの感じ方を大切に授業、音を通して仲間と結び合っていることを実感できる授業を実現することこそ、私たちのめざす音楽教育の根本であることを確信することができました。本大会で議論された内容が、次年度開催地神戸をはじめ、全国各地でさらに発展されていくことを心から祈っております。最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、ご後援やご指導、ご協力を賜りました文部科学省をはじめとする関係諸機関に衷心より感謝と御礼を申し上げます。

兵庫大会に向けて

全日音研兵庫大会実行委員長 兵庫県支部長 中西 昭人 (西宮市立甲武中学校長)



いつもは音楽室の黒板の前に設置してあるグランドピアノが誰の手も借りず広い教室の真ん中まで移動していました。全ての机や椅子がなぎ倒された教室の中央に「でんと構えたピアノ」からは「音楽室を守るぞ！音楽を守るぞ！」という逞しさと凛々しさを感じました。平成7年1月7日(火)阪神淡路大震災の朝でした。あれから18年の歳月が経ちました。今では各学校の音楽室から震災経験の無い子供たちの明るいのびのびとした歌声が当たり前のように響き渡っています。でも今日私たちが行っている音楽教育、音楽活動はその当時いただいた全国各地からの暖かいご支援と励ましの上に成り立っていることを決して忘れてはおりません。

このたび平成25年度全日本音楽教育研究会全国大会を第55回近畿音楽教育研究大会と併せて開催することとなりました。全国の皆様方にほんの少しでもご恩返しができる機会を得たことに感謝しております。

大会主題は嘗て音楽によって癒され、復興復旧に向けての意欲と元気を貰い、多くの人と出会い、心と心がつながる暖かさや温もりを知った私たちが実感として感じた思い「つながる 音・人・心」としました。またこの主題は私たちの音楽教育の目指すところでもあります。新年度早々の6月、全国各地で日々活躍される先生方に神戸へお越し頂き、私たちの拙い研究、提案に対し、ご指導、ご助言いただければ幸いです。皆様方のお越しを心からお待ちしております。

Contents

- P 1 全国大会を終えて 小林 雅彦 / 兵庫大会に向けて 中西 昭人
- P 2~3 全日音研長野大会講評
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等区教育局教育課程課 教科調査官 大熊 信彦 氏
- P 3 全国理事会 / ワークショップ&パネルディスカッション
- P 4~5 長野大会《中学校部会》 研究授業レポート
- P 6 全日音研長野大会記念演奏・Information

発行

全日本音楽教育研究会 中学校部会
東京都台東区上野桜木1-14-55
台東立上野中学校内
会長 小松 康裕

◆ 講評 ◆

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等区教育局教育課程課 教科調査官

大熊 信彦 氏

日時：平成24年11月16日（金） 9：20～

場所：ホクト文化ホール（中ホール）



北原白秋の味わい深い詩と、大中恩のオーソドックスで音楽的に質の高い作品による混声四部合唱曲『わたりどり』を扱った歌唱の授業では、雄大な山々を超え、飛び去っていくわたりどりの姿を想像し、自分の心情と関わらせて歌詞の内容をとらえ、それと、和音の構成音や各パートの役割、全体のバランスを生かした強弱の質的な変化が生み出す音楽の表現を結び付けて、よりよい合唱表現を追求していました。この曲は21小節で作られています。中学校の教科教育では、このようにコンパクトで、かつ音楽的な内容の優れた作品を取り上げることが大切だと思いました。また、いわゆる一斉授業の形態をとりながら、生徒一人一人の音楽表現に対する意欲や工夫を引き出していました。

もう一つの歌唱の授業は、小規模校による1，2，3年生合同の活動でした。本来、既習内容や発達の段階などに応じたそれぞれの学年に適した指導が必要です。一般論ですが、学級全体や学校全体として合唱が仕上がっていけばよいということだけでは、教科のねらいは実現しません。この点で、指導案を拝見すると、題材設定の理由に趣旨が明記されており、また、学年ごとの評価規準や、指導上の留意事項を丁寧に記述するなど、計画が慎重に作られています。実際の授業でも、学年単位のグループ活動での追求を全体に広めていき、共有していました。そして、音楽の授業後に行われた小中合同音楽集会の特別活動にも、それを生かしていきます。幅広い年齢の児童生徒が、仲間と共感して、自分たちのふるさとに思いを込めて歌う、オリジナルの合唱曲を聴いて、とても胸が熱くなりました。

創作の授業では、1学期に既習済みの修学旅行の思い出を詠んだ俳句に、箏曲の特徴を生かして付けた旋律をもとにして、今回はさらに変奏を加えたアンサンブルに発展させていく取り組みでした。素晴らしいと思ったことは、箏曲にふさわしい雰囲気や音楽的な特徴の作品をつくることの意味や価値に、子どもたちが気付いているということです。おそらく3年間にわたる表現や鑑賞の学習で育まれた伝統音楽に対する理解が、その基盤になっていると考えます。さらに、器楽の分野と関連付けて作った作品の演奏を追求する展開が、題材の学習の後半に用意されていることも大切なことです。こうした伝統音楽の実践は、義務教育の必修教科として、学校の教育課程に音楽が位置付けられている意義を広くアピールするものと考えます。

もう一つの創作の授業は、6時間扱いの導入段階の取り組みでした。導入の大切さと難しさから、一般に公開授業では敬遠されがちですが、今回第1時を取り上げていただいたことに、研究としての意味があったと思います。学習指導要領の「内容の取扱い」で、創作指導については即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視する配慮事項を新たに示しました。まさにこの趣旨を具現化していただいた実践だと思いました。生徒は、自由に音を鳴らして、よく聴きながら友達と音を重ねていく中で、反復・変化などの構成原理の働きにも気づき、表現に対するイメージを膨らませています。木琴を用いていましたので、多くの中学校のモデルになる取り組みでした。また、題材の終末段階で、マリンバを中心とした、いわゆるミニマルミュージックの楽曲を鑑賞する題材構成になっています。おそらく、創作の体験が生かされて、深まりのある鑑賞になると思います。

シベリウスの「フィンランディア」を鑑賞する授業では、次の時間に、背景となる当時の社会情勢と関わらせて、楽曲全体を聴くことにつながっていく一つ前の段階が公開されました。音楽は、人の心に直接訴え、様々な感情を共有できる感動的なものです。音楽が表す内容は、喜びだけではなく、慰めや悲しみ、あるいは苦しみであったりします。また、苦しみに喜びへとといったように、一曲の中で感情が変化していくこともあります。人はそれらを、音楽との相互作用において、それぞれに感じ取っていきます。このことは、生徒と音楽との関係だけではなく、その音楽を作った人、この事例では、シベリウスと生徒それぞれの感情が、約100年の時間を超えてつながっていくともいえます。実際の授業では、“シベリウスがどんな思いでこの音楽を表したかったのか”というテーマを意識して、グループや学級全体で音楽的特徴を探り、理解を深めていました。なお、次の時間に批評の活動がありますが、押さえておきたいことは、批評そのものが最終目的でないということです。重要なことは、自分が感じ取ったこと、その理由としての音楽的特徴、自分なりの評価を、楽曲の背景や作曲家などと関わらせながら思考・判断・表現すること、すなわち、批評することによって主体的、創造的に味わっていく力を高めていくということです。

もう一つの鑑賞の授業は、ICTを活用して日本と韓国の生徒たちがリアルタイムで交流する取り組みでした。発信・受信の双方向で行う、このICTの技術にとっても興味を持ちますが、今回の公開授業のポイントは、人同士が、考え方・文化などの違いを超えてよりよく生きていくため、自分が感じたことや考えたことをしっかりと表現し、同時に尊重し合い、問題解決を図りつつ互いに高まり合うことのできる知性と感性を持つということに、音楽教育が大きく貢献するこのことを示していただいた点

にあると考えます。今、ESDと呼ばれる「持続可能な開発のための教育」が注目されています。これは、これから生まれてくる次の世代の人を含め、全ての人により質の高い生活をもたらすことのできる状態で開発を目指すことであり、言い換えれば、地球的な視野を持って行動できる市民を育成する教育です。音楽文化の多様性について、表現と鑑賞の直接体験を通して理解を深めていく音楽科ならではの学習指導を、今回の取り組みを契機として、今後一層私たちは研究・追求し充実していく必要があると思いました。

少しずつ実際の授業を振り返りましたが、いずれも“音楽の意味や価値を自ら見だし、心が響き合う授業づくり”という中学校部会の主題に即した内容でした。そして、学習指導案を改めて拝見すると、「学習素材の研究と教材化」の記述において、子どもの学びの視点で教材の価値を分析していることがわかります。また、新しい学習評価の趣旨に即した適切な評価規準が設定されています。今年度、本格的にスタートした新教育課程における指導と評価を進める上で、全国の学校の参考になる優れた資料を提供していただいたと考えています。音楽の学習を通じて、音楽に関する知識・技能、思考・判断し表現する力を伸ばし、感性や美的情操を養うことはもちろんですが、その学習過程で、例えば課題解決力、自己理解力と他者理解力、人間関係形成力、さらには一層成熟した社会を形成する力などを高めていくことができると確信いたしました。また、ワークショップやシンポジウムも意義ある内容で行われました。本大会の成果が全国へと広がっていきますことをご期待申し上げます。大会に携わられたすべての皆様に心から敬意を表しますとともに、ご参会の皆様には、どうかご健康に留意され、子どもたちのために一層優れた音楽教育の実現に向けてご活躍くださいますことを申し上げまして講評とさせていただきます。

◆ 全国理事会 ◆

日時：平成24年11月14日（水） 14：00～
会場：ホテルメトロポリタン長野



理事会は、勝亦悦子副会長の開会の言葉で始まり、続いて小松康裕会長より挨拶があった。長野大会開催へのお祝いの言葉、新学習指導要領完全実施にあたって授業改善に努めること等を述べられ、平成25年度が兵庫県で、平成26年度が東京都で全国大会が開催されるという報告があった。続いて開催県を代表して小林雅彦支部長より挨拶と長野大会の紹介があった。その後、氏家仁志調査研究部長より調査研究報告、風見章事務局長より表彰に関する報告、中西昭人支部長より平成25年度兵庫大会の紹介、菊本和仁支部長より平成26年度東京大会の紹介、参加19支部から活動状況の報告があった。

最後に会長より全国大会開催地決定方法について話があった。現在平成27年度までの全国大会開催地が決定しているが、年々さまざまな課題により決定までの調整が難しくなっており、平成32年度以降については「現ブロック区分（7地域）の輪番制とし、各ブロックで開催地を決定する」との提案があった。今後も継続して審議・協議する方向で意見が一致し、井田博之副会長の閉会の言葉で終了した。

平成24年度 全日本音楽教育研究会全国大会 長野大会 中学校部会

◆ ワークショップ&パネルディスカッション ◆

日時：平成24年11月15日（木） 15：30～16：40
会場：ホクト文化ホール



- ①歌唱 「分かち合おう合唱の喜びを」 : 富澤 裕 (作曲家・合唱指揮者)
曲の命を引き出し、子どもたちが音楽の魅力を表現できる喜びがもてる合唱指導
- ②音楽づくり・創作 「音から創造的な音楽へ」 : 後藤 洋 (作曲家)
多様な音楽の面白さに触れながら、音や音楽の見方を広げ、創造性を育む、音楽づくり・創作のヒントとアイデア
- ③鑑賞 「これからの音楽鑑賞教育で求める大切なもの」 : 宮下 俊也 (奈良教育大学 教職大学院 教授)
豊かな人生と、持続可能な社会づくりにつながる学力育成を目指した授業づくり
- ④日本音楽 「日本料理は箸で美味しく、日本音楽は日本語で楽しく」 : 伊野 義博 (新潟大学教授)
教材を日本の視点から捉え直し、普段話していることばを楽しみながら子どもたちがもつ音楽性を引き出し、育むための活動プラン
- ⑤パネルディスカッション 「音楽科が歩んできた道 歩んでいく道」
これまでの音楽科が歩んできた道を振り返りつつ、これから歩んでいく道について共に考えませんか？

◆研究授業レポート◆

日時：平成24年11月15日（木）

会場：長野市立裾花中学校・ホクト文化ホール

研究主題『音楽の意味や価値を自ら見だし、心が響き合う授業づくり』



【鑑賞】第3学年

題材名 「作曲者の主張とその表現方法を、感動した要因から探ってみよう」

（教材名 交響詩「フィンランディア」）

指導者 長野市立裾花中学校教諭 細川 淑子

作曲者の主張がどのような手法によって音楽に表わされているか、鑑賞者の感動をもとに探る授業であった。楽曲を聴き、作曲者が伝えたかった思いを想像して楽曲の背景を知ることから始まり、ワークシートを使用して各自が楽曲の構成を理解しながら聴き、印象に残った部分に印をつけてその理由を書いていた。その後、各グループに分かれ、特に主題Bに焦点を絞り、楽曲のもつ作曲者の思いをCDプレーヤーを使って聴いた。諸要素の特徴から聴き取り、KJ法を使い色別カードに書いてグループでまとめ発表した。



生徒たちは積極的に音楽の諸要素（旋律・強弱・テクスチャ等）の特徴を聴き取りながら授業が進んでいた。また、授業者の適切な指示やアドバイスの良さが印象に残った。

【鑑賞・歌唱】第1学年

題材名 「日韓の伝統的な歌唱曲を互いに学び合おう」

（教材名 「さくらさくら」「珍島アリラン」）

指導者 長野市立裾花中学校教諭 山岸 浩

日韓の中学生が各国の伝統的な歌唱曲を学び合う、ICT（同時画像）を活用した遠隔授業であった。はじめに、裾花中の生徒が「珍島アリラン」を歌い、韓国の安心中学校の生徒に聴いてもらい、感想を述べた。その後、地元の大人も巻き込んだ韓国の生徒による「珍島アリラン」を鑑賞し、楽曲の特徴に気づき、音楽の良さや美しさの味わいを深める授業であった。次に「さくらさくら」に曲を変え、互いに聴き合い、感想を述べ合った。裾花中の生徒が歌う時には、地元の尺八・箏の方も加わり、演奏に花を添えた。



ICTを使った日韓交流授業で、普段からできる授業ではないが、メディアの発展によっては、そう遠い未来の話ではないようにも思えた。最後には、合同で両国の曲を演奏し、交流を深めていった。

【器楽・創作】第3学年

題材名 「箏の奏法を生かして、俳句の世界を音楽で表現しよう」

（教材名 自分たちの俳句に旋律をつけた創作曲）

指導者 長野市立北部中学校教諭 長谷部 直子

箏の音色と平調子の音階を生かして、1学期に行われた修学旅行の思い出を詠んだ俳句に旋律をつける創作の学習をもとに、これまでの学習で感じ取ってきた箏の音色や様々な奏法を自分達の作品に生かし、二人で2パートで構成された変奏曲形式の作品を創作する学習活動が展開された。二人で1面の箏を使うことにより、互いの表現を聴き合って、互いの表現のよさを共有しつつ、よりふさわしい表現を引き出すことができていた。また、その学びのプロセスがわかるワークシートが工夫されていた。俳句で表したい雰囲気や情景を箏の音楽で表現したいという生徒の強い気持ちを感じることができた。



【創作】第3学年

題材名 「イメージを明確にしながらまとまりのある音楽をつくろう」

(教材名 「動機の繰り返しを伴う三部形式の創作」先輩の作品) 指導者 長野市立川中島中学校教諭 竹腰 益臣

木琴を使って三人で創作を行う6時間扱いの題材の第1時の授業であった。まず、先輩の作品を視聴し、作品を構成していく手がかりや創作活動の見通しを持たせていた。次に、言葉や音で伝え合いながら、自分達のイメージを膨らませ明確にして創作を進めていた。

ワークシートは、思いや意図を具体化し、音楽表現を工夫していく過程を把握しやすいように工夫されていた。音を音楽に構成していく過程で、生徒達は思考・判断・表現を繰り返し、互いの思いを共有し、楽しみながら創作に取り組んでいた。

本題材の終末段階には、プロの作曲者の作品を鑑賞する学習が用意されているが、創作の学習で学んだことを生かして、分析的に聴いて作品のよさを味わうことが期待される。



【歌唱】第2学年

題材名 「歌詞が表す情景や心情を合唱で表現しよう」

(教材名 「わたりどり」)

指導者 千曲市立更埴西中学校教諭 西澤 真一

21小節の混声三部合唱曲「わたりどり」を教材として、強弱表現を工夫することに主眼を置いた学習の取り組みであった。今までの「強弱」の音量的な変化に、「テクスチュア」や「旋律」にかかわる新たな視点を加え、「和音の構成音」や「各パートの役割と全体のバランス」を生かした「強弱」の質的な変化を追求していた。

生徒達は、強弱を音量だけではなく、和音、パート、バランスなどを考えながら工夫することで、曲の雰囲気が変わってくることに気づき、音楽表現の質的な高まりを実感していた。さらに、歌詞が表す情景や心情と結び付けて、新たな「わたりどり」と心の響き合いが生まれた。



【歌唱】全校

題材名 「私たちのふるさとに思いを込めて表現を工夫しよう」

(教材名 「ふるさと中条」中条小学校児童、中条中学校生徒作詞 なかにしあかね作曲)

指導者 長野市立中条中学校教諭 宮崎 靖代

生まれ育った中条への思いを込めた詩をもとに作られた「ふるさと中条」を教材とした小規模校の取り組みであった。本題材は学年別グループ活動を取り入れて、発達段階に応じた指導内容で学習が進められていた。授業の中で、根拠を明確にして表現を工夫することが繰り返されていた。また、全学年で合わせることによって、互いのよさを認め合いながら、各学年の意図や工夫を共有してふるさとへの思いを込めた合唱表現を追求していた。

さらに、音楽の授業での学習を小中合同音楽集会での小中合同合唱に繋げ、教科学習と特別活動との関連、小中連携を図っていた。



◆ 記念演奏 ◆

日時：平成24年11月16日（金） 10:05～
 場所：ホクト文化ホール（大ホール）

※「 」は演奏曲目



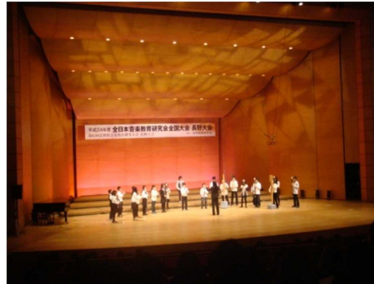
1 オペレッタへの取り組み

長野市立朝陽小学校4学年
 オペレッタ
 「ないない宇宙人とロボット」



2 リコーダーアンサンブル

岡谷市立湊小学校6学年
 ジェルベーズ舞曲集より
 「イギリスのパヴァーヌ」他



3 みんなでプラス！

上田市立西内小学校5・6学年
 「A DISNEYLAND CELEBRATION」



4 全校がひとつになる合唱

栄村立栄中学校全校
 混声三部合唱
 「きょう わたしは」



5 引き継がれる歌声

信州大学教育学部附属長野中学校3学年
 混声合唱組曲『未来への決意』より
 「決意」 他



6 音楽の根源に迫る表現

長野県長野ろう学校
 混声二部合唱「HE IWAの鐘」
 和太鼓演奏「龍神太鼓」



7 音楽 だいすき！！

信学会長野北幼稚園
 斉唱「世界中の子どもたちが」
 合奏「ラデッキー行進曲」



8 吹奏楽への取り組み

長野市立裾花中学校吹奏楽部
 歌劇「フェドーラ」より



9 音楽を通したつながりづくり

長野ジュニアオーケストラ
 信州大学附属長野中学校3学年・教員有志
 『合唱とオーケストラのための信濃讃歌』



Information

全日音研中学校部会ホームページも是非ご覧ください。 <http://zennichionken-jhs.jp/>